

2018年7月8日

福音書からのメッセージ

この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。

(マルコによる福音書 6章3節)

わたしたちにとってイエス様とはどんな存在でしょうか。

イエス様は伝道活動に出た後、故郷に帰り会堂で教えられます。イエス様は30歳のころ、家を出て故郷を離れ、活動を開始したと考えられています。きっと会堂には、イエス様の少年・青年時代をよく知る人物がたくさんいたことでしょう。

会堂でイエス様の話を聞いた人々は、たいへん驚きました。しかしその驚きは「すごい」、「立派になったな」という驚きではなく、「何であいつが」という非難のこもった驚きだったようです。それは「この人は大工ではないか」という言葉に現れていると思います。イエス様の故郷は、小さな村です。みんな小さい頃から、お互いのことをよく知っていたでしょう。その中の一人、大工だったイエス様が村を出て、まるで教師のように教えている。当時の大工は、会堂で話すような人よりも相当に地位も階級も低かったのに、いつの間にか偉そうに、みんなの前で話しているのです。人々はそこにつまずいてしまいました。

彼らの心には、喜びではなく、ねたみや不快な思いが渦巻いていたことでしょう。そしてイエス様はその彼らの心、つまりご自身につまずいてしまった彼らの心を見抜き、人々の不信仰に驚かれます。故郷の人たちは、イエス様があまりにも身近な人物であったがために、イエス様のことを受け入れることができませんでした。

しかしイエス様が人々と一緒に暮らし



たことは、とても大事なことです。イエス様は突然空から現れた神の子ではありません。人々と共に生活し、苦しみも悲しみも同じように経験してきた、そんなお方なのです。

す。上の方からわたしたちをじっと見つめ、頑張れよと声を掛けるのではない。わたしたちがいる場所で、わたしたちの気持ちを汲み取り、共に笑い、共に泣いてくれる存在、それがイエス様なのです。

先週の木曜から、日本列島は大変なことになっています。今まで経験したことのないような大雨に見舞われ、たくさんの方が涙を流し、心を痛め、途方に暮れているその中で、わたしたちには何ができるのでしょうか。

わたしは思います。イエス様はきっと今、震えながら助けを待っている人たちの傍らにいてくださる。家族を失い悲しみのどん底にいる人の涙をぬぐってくださる。懸命に救助作業をしている人たちを支えてくださる。泥だらけのところにその身を委ね、今、傷ついている人と共にいてくださる。

そのことを信じて、イエス様は必ずその方々と共にいてくださると信じて、祈りを届けたいと思います。イエス様は、苦しむ人の傍らで、手を差し伸べ、関わってくださるのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>